中学校における，医薬品教育の現状と今後のあり方

齋藤　竜汰（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　谷川　尚己

キーワード　医薬品教育，保健教育，セルフメディケーション

1. 諸言

新学習指導要領では，従来，高等学校保健体育科「保健」で指導する医薬品教育が中学校，さらには小学校に移行し，学校での医薬品教育の一層の充実が求められる．小学校から中学校，高校へと指導内容を継続的に積み上げることが求められ，医薬品に対する正しい知識の獲得が必要となる．本研究では，医薬品に対する，知識理解を調査し，今後の医薬品教育のあり方，授業実践に寄与することをねらいとして行うものである．

2. 研究方法

本研究では，滋賀県G中学校，滋賀県K中学校，福井県T中学校，合計382人を対象に薬に関する5項目のアンケート調査，5項目の○×クイズを行った．

3. 結果と考察

薬を飲むとき，誰に相談しますか？において，「保護者」と答えた生徒は，75%であり，「相談しない」と答えた生徒は24%であった．2013年の堺らの研究によると「保護者」の回答は89%であり，「相談しない」と答えた生徒は4%であった。保護者に相談せず，自らで医薬品を服用する生徒が増加している．生徒の感想の中にも「保健でやったことのある内容であった」などの記述があり，医薬品教育の開始が影響している可能性を示唆している．

薬はコップ1杯の水，ぬるま湯で飲むことがふさわしいでは，授業前はいいえと答えていた生徒は10%であったが，授業後は2%に減少していた．薬はお茶や，ジュースで飲むのではなく，水またはぬるま湯で飲むこと，コップ1杯が適しているということを大半が理解したものと考える．授業後の感想においても，「牛乳やお茶で，飲んでいるけど，危ないからやめようと思った」などの理解度の高い感想が書かれていた．

説明書を読むときどのような内容を読みますか？では，「薬の名前」と回答した割合は17%であった．2011年の葛谷らの研究によると，46.2%であり，現在では「薬の名前」を読んでいない生徒が増加したことがわかる．また，本研究で「副作用」と回答した割合は17%であり，葛谷らの調査結果の43.6%を大きく下回った．このことから，中学生では，副作用をついて考えることなく，服用していることがわかる．

4. まとめ

本研究では，医薬品を服用する際，保護者に相談せず，自ら選択し，服用する生徒が増加していることが分かった．また，説明書を読む際に「薬の名前」「副作用」を確認する生徒の減少という結果が得られた．この2つの結果から，学校教育における，医薬品教育の重要性が増していることがわかる．特に，「説明書を必ず読むこと」の指導の充実が求められる．また，医薬品教育を行うことで，「危ないものは口には入れない」などの知識を理解することができるため，薬物乱用防止教育の前段階の学習として効果的であることがわかった．

引用・参考文献

谷川尚己ら(2013)「大学教員による小学生を対象とした保健指導−薬教育の実践およびその理解度について−」．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 11:64-69